



むぐっ!!

フェラが大好きなんだろ?
ちゃんとこ奉仕しないとなっ!

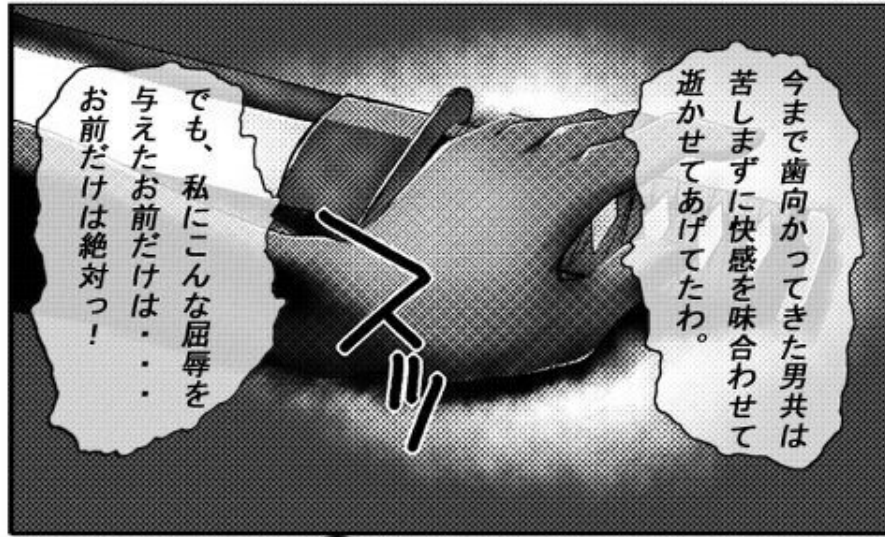


おっ!!おっ!!おっ!!



んっ!!









いやあああああああ
ああっ!!

まったく
乳もケツもエロそうに
しやがってよおっ!



悪いが、無理な話だ。
個人的な恨みはないが
こちらら仕事なんでね。



おいおい、今更命乞い
とはねえ...

や...めつ。
たすけ...て!



あんた、町の人間から恨みを買すぎた。
今回の依頼主は一人や二人じゃねえ。
多くの人間があんたの死を望んでいる。

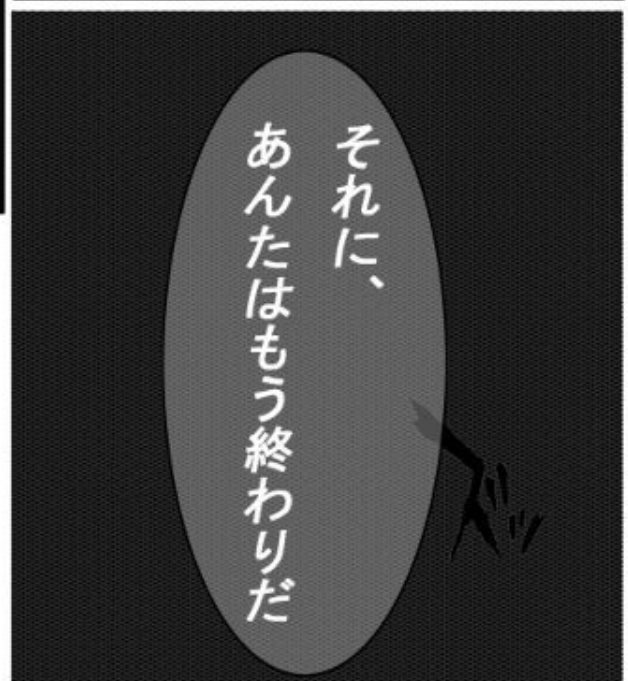
お、お願い。たすけてっ。
見逃してくれたら何でもしてあげるっ！
あなたが望むなら私の身体なんて
いくらでも！



そいつは嬉しいお誘いだが
腕を失ったあんたの身体は御覧の通り、
やりたい放題だ。



ほお……



それに、
あんたはもう終わりだ



絶命奥義　　屍遊び
快感を与え続けた後、既に斬られた
肉体は徐々に崩壊。更には精神さえ
も破壊し、極楽と地獄を味わい
ながら逝く。

腕を斬り落とした時には
もう既にてめえはこの技を受けて
動く死体も同然だったのさ。





残虐非道な技故、禁じられた技だが、子供
さえも手に掛けるあんたのような下衆には
ちよどい技だ。
あの世でこれまでの非道を悔いな。

そしてー



ナンバー2。
次はあんたの番だぜ。

「ちようど終わったようね」
駆け付けた始末屋仲間の女が男へ駆け寄ってくる。

「そっちは？」

「雇われの浪人とは言ってもほとんどが素人同然の腕前。おまけに女相手だと
思っただけで全員ナメてかかってきたからバラしてやったわ」

男は半笑いを浮かべ、再び女の亡骸に目をやった。

「まあ、しかし、だ。悪行を重ねてきたとはいえ勿体ねえことをしちまったな」

「死んで当然じゃない、こんな女」

女は口を尖らせた。

「道を踏み外さなければ、每晚お願いしたいぐらいの身体の娘だったぜ。しかも噂じゃ、
名のあるところの娘だって話だ。まっ、単なる噂に過ぎねえが……」

「ふう〜ん」

女はしばし亡骸を見つめた後、何かを思いついたのかうすら笑みを浮かべ

男の顔を覗く。

「ねえ、この女になってあげようか？」

「はあっ!？」

「私がいっつを着るの。そうすればこの女の身体をやり放題じゃん。中出しされるのだけは勘弁だけど」
「ばっ、ばかなこと言っただけで捕まってるガキ供を連れてさっさと帰るぞ。いつまでもこんなところで
油を売ってられねえ」

男はあきれ顔交じりに足早にその場を去った。

「まったく、冗談だったのに……」

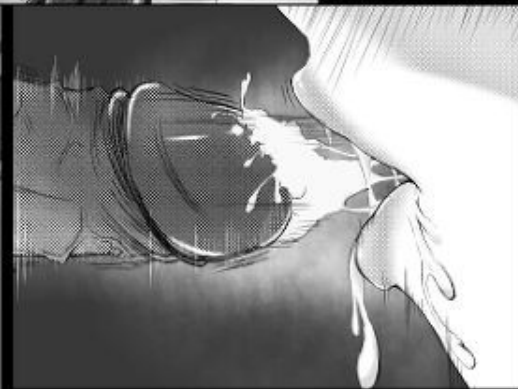
女は笑みを浮かべる、が、すぐに未だビクついた女の亡骸に視線をやった。

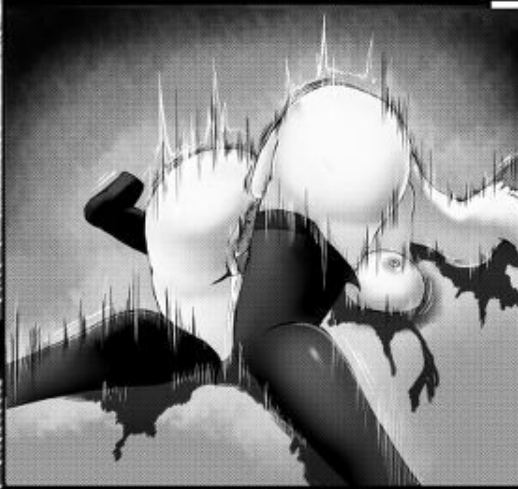
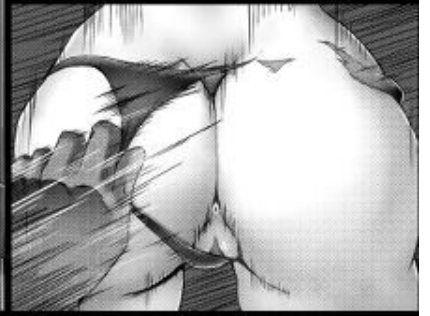
「醜い最期なこと……でも、一度あんたのような良い身体を着てみたいのよねえ。あんたのお尻、唇、
胸……そう、お前の身体ならあいつを私のモノに出来そうなの。だから……」

女は狂気にも似た笑みを浮かべると、そっと亡骸の大きな乳房を触りだした。


「なんて柔らかくて、綺麗な肌。それにとても大きく。こんな肌に他の不要なモノは必要ないわよねっ!」
女はまるで獣の如く、飛び出した臍物・肌に張り付く女の肉、そして骨をも抉り出していく。

「中身は後でちゃんと肥料や家畜の餌にでもしてあげるわ。そして地獄から魂の抜けた身体の行く末を
見守り続けるといいわ。ふふふっ」









…うっすうっすうん

お母様にいただいたやつ、これじゃあ小さくて
胸がはみ出ちゃうよお…